



後期旧石器時代から縄文時代草創期 (約 30,000 年前～約 11,200 年前)

# はじめにやってきた人たち

青森県の旧石器時代の遺跡は 20 数か所で、いずれも約 3 万年前に始まる後期旧石器時代から縄文時代草創期(約 16,500 年～約 11,200 年前) にまたがる時期のものである。

今から約 2 万年以上前の氷河期ひょうがきの期間に、日本列島はアジア大陸と陸続きの時があり、下北半島の尻屋崎しりやざきや尻労村しつかりむらの石灰岩地帯せっかいがんちたいから、南からやってきたナウマンゾウやニホンジカ、北からやってきたヒグマなどの化石が発見されている。それらを追いかけて狩人たちが青森へやってきたか？東通村物見台遺跡ひがしどおりものみだいせきや三沢市淋代平遺跡さびしろたい、大平山元川遺跡おおだいやまもとから、そのころの石器が発見されている。



## 発茶沢 (1) 遺跡 (約 16,500 年前～約 12,700 年前)

### 後期旧石器時代か？縄文時代草創期か？「石器」が出土！

千曳浮石層ちびきふせきそう (約 12,700 年前) の直下から搔器そうきが単独で出土。同じ地層と考えられる表館 (1) 遺跡おもてだてから隆起線文土器りゅうきせんもんどきが出土しているので、縄文時代草創期とも考えられている。旧石器時代の石刃技法せきじんぎほうで制作された石器で、この技法は隆起線文土器を作っていた時期のものではないことから、旧石器時代と同じような生活、つまり、キャンプをしながら転々と移動し、狩猟・採集・漁労しゅりょうさいしゅうぎょうろうをして、この六ヶ所の地にやって来た人々と考えられる。



図 I-1 地図：発茶沢(1)遺跡



図 I-2 発茶沢遺跡(1)の発掘調査の様子



図 I-3 発茶沢(1)遺跡出土の石器

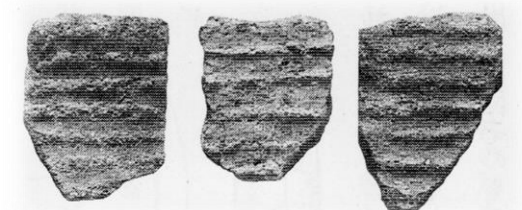


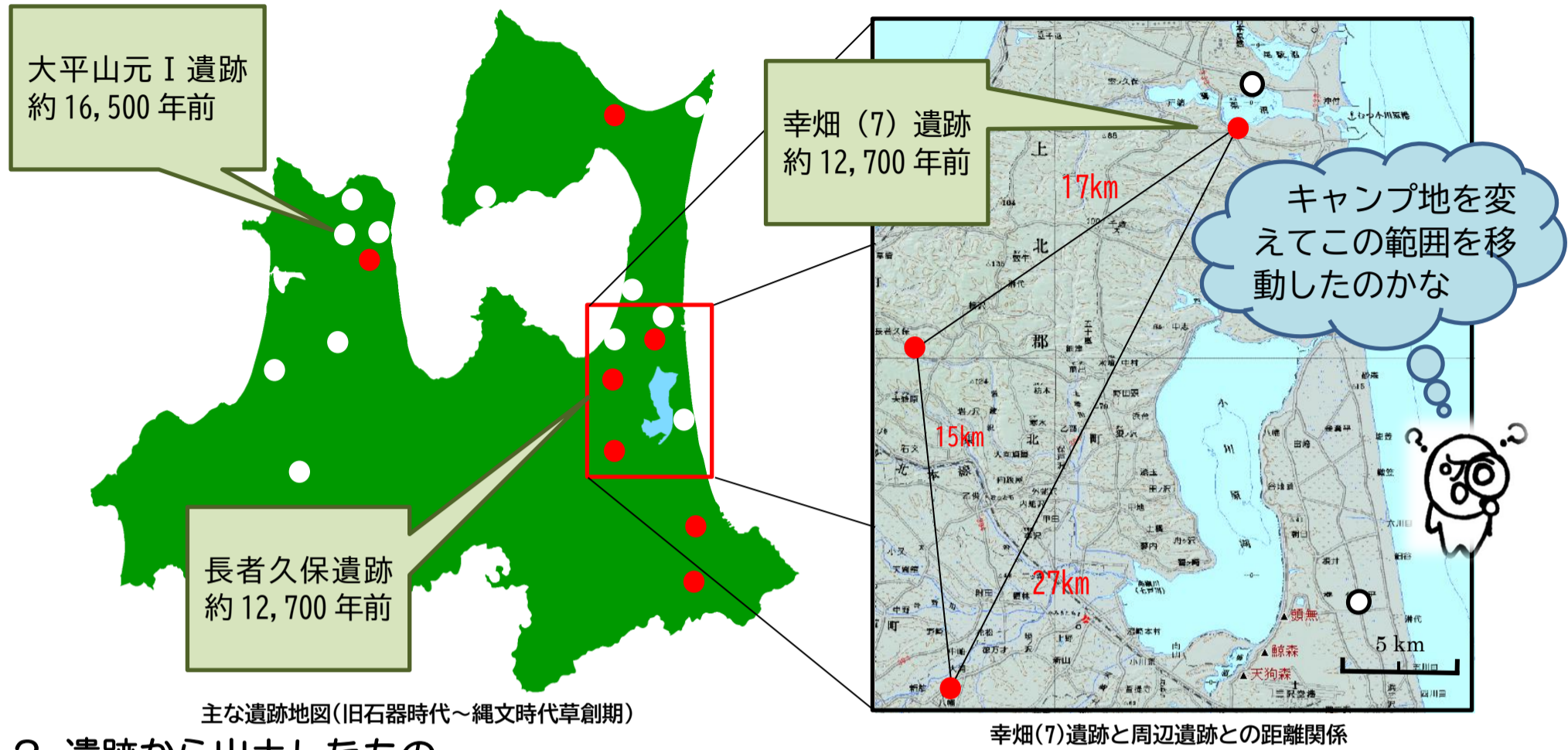
図 I-4 発茶沢(1)遺跡出土 隆起線文土器

# はじめて六ヶ所村にやってきた人たち

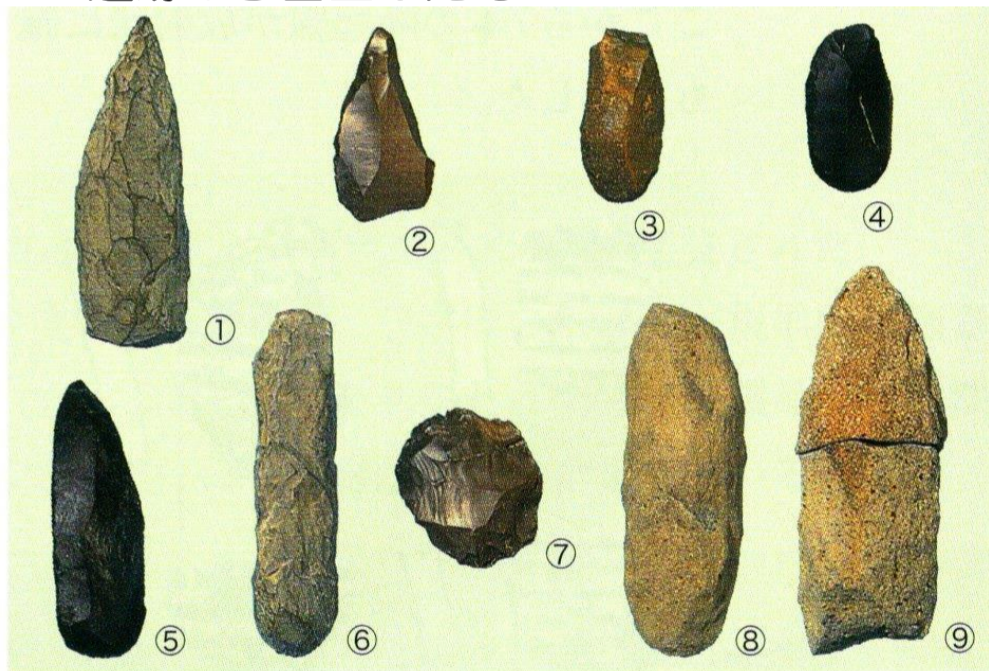


～旧石器時代から縄文草創期の遺跡～

## 1 ○主な旧石器時代と●縄文草創期の遺跡



## 2 遺跡から出土したもの



図Ⅱ-1 幸畑(7)遺跡出土遺物

番号	石器名	使い方
①	せんとうき 尖頭器	槍の先に付ける道具
②	ちょうこくとうがたせっき 彫刻刀型石器	木や骨などを彫る・削る道具
③～⑥	そうき 搔器	動物の皮をなめす道具
⑦	せっかく 石核	石器づくりの余った石材
⑧	まるのみがたせき 丸鑿形石斧	木材の加工に用いた斧
⑨	だせいせき 打製石斧	

### 1 動物を追いかけて移動していた

旧石器時代や縄文草創期の遺跡からは、  
住居跡の出土が極めて少なく、幸畑(7)遺跡か  
らも<sup>たてあなじゅうきよあと</sup>竪穴住居跡は、確認されていないことか  
ら、<sup>かんい</sup>簡易なテント小屋の住居をつくり、移動し  
て生活していたと考えられている。

### 2 道具からわかる当時の暮らし

幸畑(7)遺跡からは、<sup>おおがたどうぶつ</sup>大型動物を狩るための  
<sup>せんとうき</sup>尖頭器や、<sup>けがわ</sup>毛皮を作るための<sup>そうき</sup>搔器が出土した。  
他にも、木を<sup>き</sup>伐り<sup>かんい</sup>簡易なテント小屋の住居を  
作るための<sup>せきふ</sup>石斧なども出土した。縄文草創期  
(約12,700年以上前)の人々は、動物を追って、青  
森県やこの六ヶ所村にやって来たと考えられ  
る。



おおがたどうぶつ

大型動物を追いかけて、<sup>しゅりょうさいしゅう</sup>狩猟採集のキャンプ生活をしていた



縄文時代草創期 (約 16,500 年～約 11,200 年前)

# はじめに土器を作った人たち

約 13,000 年前に十和田湖の原型をつくった大噴火があったころ、寒冷な気候がだんだんと暖かくなり日本海側に暖流が流れ込み、雪が多く湿度の高い現代の気候に近くなる。

野山の木々も針葉樹からブナ・ナラ・クリなどの落葉広葉樹の森に変わり始めた。土器の出現により、そのままでは食べられない植物も食用可能となり、その後、人口増加や定住生活につながった。土屋根の竪穴住居に住み土器や弓矢を使い始め、石皿や磨石が一般化する。

## 幸畑(7)遺跡 (約 16,500 年前～約 12,700 年前)

### 狩猟中心に移動した、ベースキャンプのようなところだったか？

現在、鷹架野鳥の里森林公園となっている幸畑(7)遺跡は、鷹架沼右岸の台地上にあり、長者久保・神子柴系石器群が、50 m<sup>2</sup>というせまい範囲で、千曳浮石層の下から約 220 点が出土。接合した石器もあり石器製作の可能性が指摘されている。東北町長者久保遺跡と共通する要素が見られる。定住社会となる前、狩猟が中心で獲物を追って移動し、定期的に人々が集合するベースキャンプのようなところだったと考えられる。

1 遺構 なし

2 遺物 円鏝 1 点、打製石斧 3 点、搔器 5 点、彫器 1 点、片面尖頭器 1 点、円盤形石核

1 点、未成品石器 (砂質安山岩) 2 点、礫石器 2 点、剥片 97 点、チップ 107 点

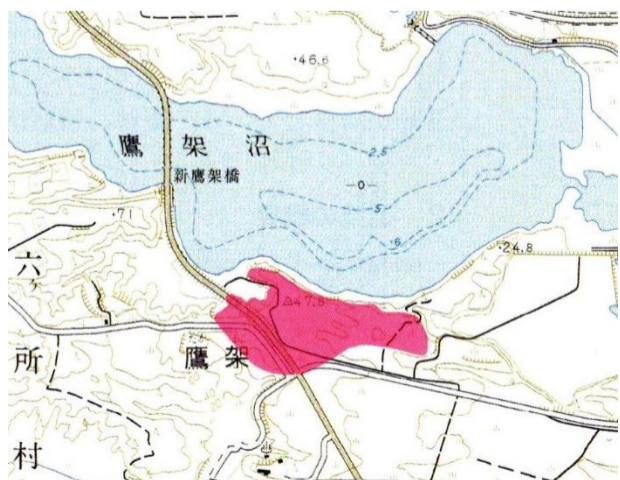


図 I-5 幸畑(7)遺跡の位置

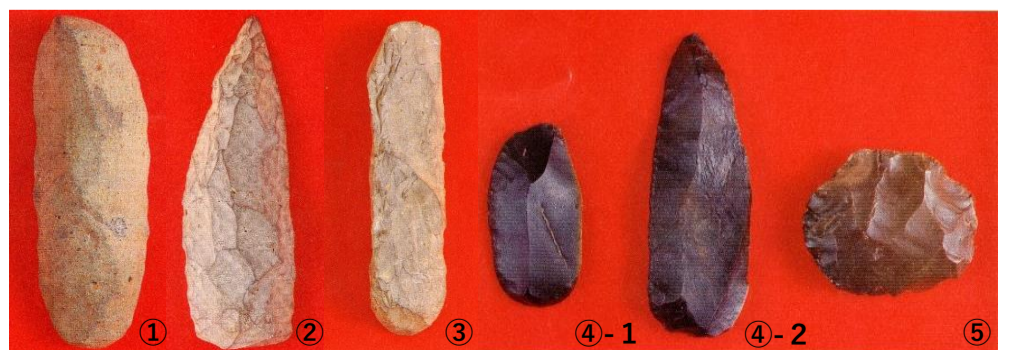


図 I-6 幸畑(7)遺跡出土の石器

青森県埋蔵文化財調査センター所蔵

- ①円鏝
- ②片面尖頭器
- ③搔器
- ④搔器 2 点
- ⑤円盤形石核

## 表館(1)遺跡

(約 12,700 年前)

## 縄文土器は、ただの煮炊き用の器だったのか？

表館(1)遺跡は、尾駮沼と鷹架沼との間の東西方向に舌状に張り出した標高約 20m の海岸段丘上にある。縄文早期から前期にかけての集落を主体とする大規模な複合遺跡である。

千曳浮石層とその上の層から出土した草創期の隆起線文土器は、全体の器の形がわかり、全国的な広がりがある資料として重要である。乳頭状突起を持つ尖底深鉢で、器の面に 37 本の横向きの隆起線が貼り付けられ、口縁部で縁部が緩やかに外反する。底部に 2 本一組の隆起線が垂下し、口縁部の小波状帯とともに特徴的な文様を構成している。底部が、女性の胸部に見えることから、土器自体が女性や生命を象徴しているのではないかと考える説や底部の乳頭状突起は月から水が流れている様子を表し、生命の再生を象徴していると考えられる説もある。

- 1 遺構 集石遺構 3 基 (焼けた礫)
- 2 遺物 隆起線文土器 1 個体分の破片 (県重宝)、円孔文土器 1 点、不定形石器 1 点



図 I-7 地図：表館(1)遺跡



図 I-8 表館(1)遺跡の調査風景

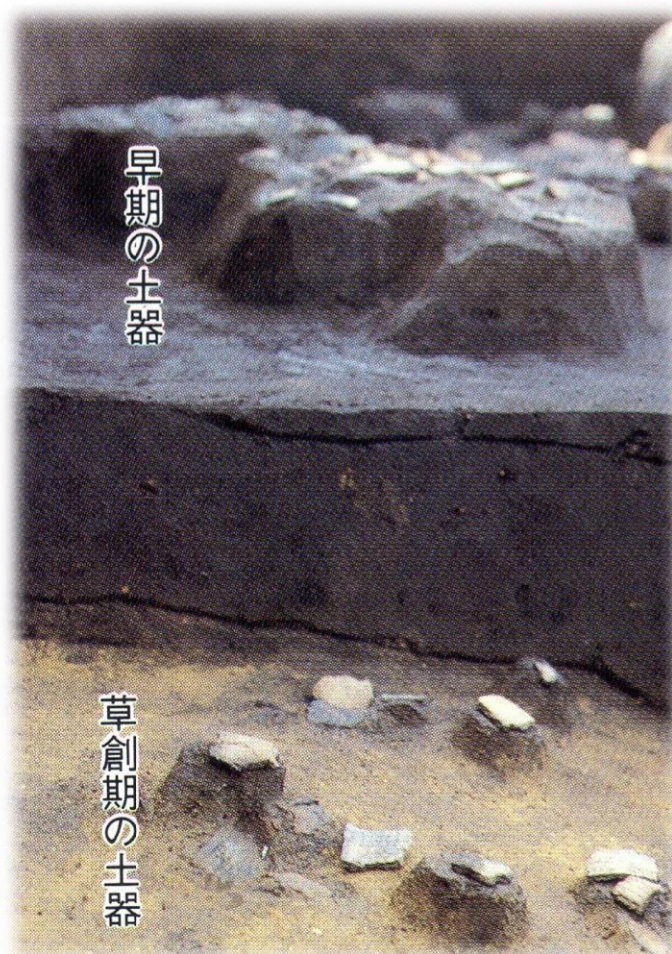
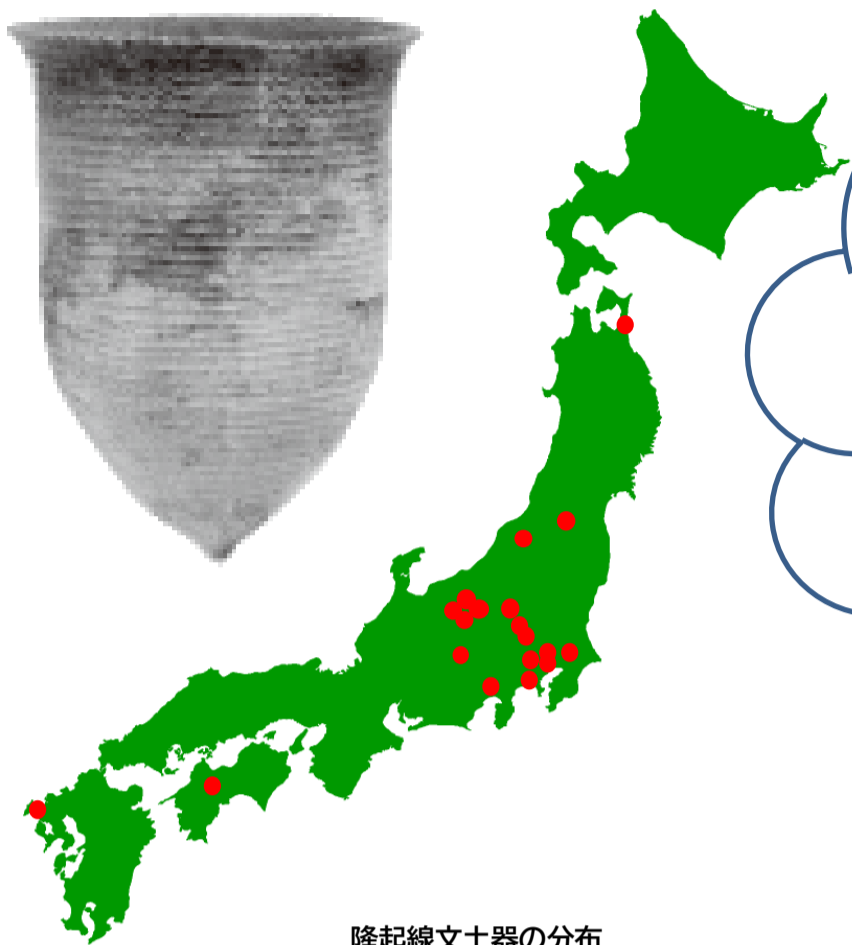


図 I-9 隆起線文土器の出土状況



図 I-10 隆起線文土器

# 縄文土器はただの器だったのか？



隆起線文土器の分布

びりゅうきせんもん ど き  
微隆起線文土器の仲間は、  
おもてだて  
表館 (1) 遺跡からも出土したことから、九州から青森まで全国的に広がっていたことがわかったそうだ！

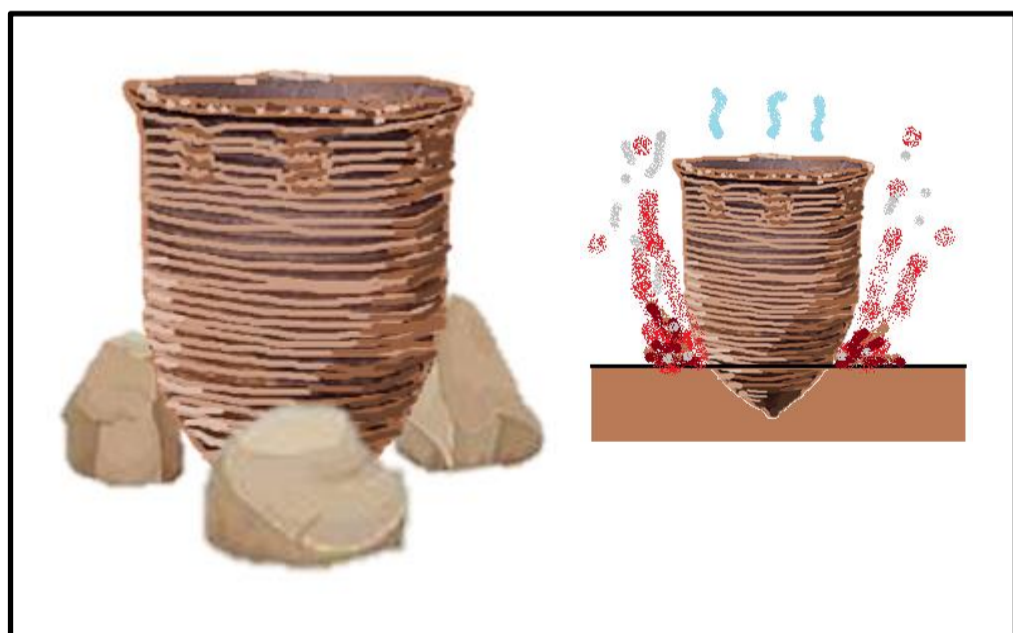


母体を表す縄文土器

## 1 はじめの縄文土器はなぜ形が不安定なのか

はじめのころの縄文土器は底が尖る、または丸いなど、形が不安定だった。鍋の機能として熱が伝わりやすいという考えや、器として生きるために必要な水や食料を蓄えるものとして、その形は命を宿す子宮を表現しているという考えもある。(参考文献：大島直行 2014『月と蛇と縄文人』寿朗社)

縄文土器は恵みを与える母なる存在？



隆起線文土器の使い方

## 2 不安定な器の使い方

当時の人々は石を利用したり、地面に突きさしたりして、調理をしていたと考えられている。表館 (1) 遺跡からは石が敷き詰められた場所が見つかった。石が熱で赤くなり、焼けた痕跡があるので、調理場の跡だと考えられている。

敷き詰めた石のすき間に土器を固定？

土器に、命の再生や生きることの願いを込めた縄文人